

○「第3学期 終業式」を12月24日(金)に、新型コロナ感染防止対策のため校内放送を使って実施しました。

○以下は校長式辞です。



私たちはいろいろな人に応援されている

～ 本校校歌の作曲者 古関裕而氏 ～

10月1日から始まった3学期も今日で終わり、新年からは4学期になります。

この約3ヵ月を振り返った時、皆さんはどんなことができるようになりましたか。あるいは、どんな考えや知識を新たに持つことができましたか。是非振り返ってみてください。

学校全体としてこの学期を振り返ってみれば、3学期始業式の後すぐに学園祭が行われ、これまでとは違うやり方が求められましたが、皆さんの創意と工夫によって、これまでとは違うけれども充実した中身の濃い学園祭になりました。

10月には、県の高校総文祭が最上地区で開かれ、部毎に作品を出品してくれました。また、1年次生は、いのち耕す体験学習を行い、人々のために働くとはどういうことなのかを実体験をしながら学ぶ機会がありました。さらに、生徒会選挙では、新生徒会の会長を始めとする役員を選び、1、2年次生を中心とする新体制がスタートしました。先週の土曜日には、校内でリーダー研修会も開催し、高畠高校をリードする皆さんが互いに議論をしながらこれからの生徒会を考えてくれました。

2年次生にとって、11月は高校生活最大のイベントとも言われる、研修旅行がありましたね。コロナ感染対策のためにいろいろな制約があったにも関わらず、2年次のみなさんは、辛抱強く、全員が協力し合ってやるべきことをやり、楽しい研修旅行を完成させてくれました。2年次生がみんなで造り上げた研修旅行だったのではないかと思います。

3年次生にとっては、10月～11月は何をおいても進路のための期間だったと思います。就職にしても進学にしても、多くの3年次生が希望進路を達成で

きたかと思いますが、これからの人もいます。これから決まる人のことを全員で応援していきたいものです。

さて、話はかわりますが、「福島民友」という福島の新聞投稿欄に載った投稿を紹介します。今年の8月6日付の「窓」という読者のページに載った投稿で、タイトルは「高畠高校 校歌は古関裕而作曲」という見出しで始まり、投稿者は山形県上山市となっています。その内容は、

「野球好きの私は福島の球場にも足を運ぶ。福島のあづま球場は山形から比較的近く、素晴らしい球場だ。今年は高校野球をまだ1試合も観戦していない。というより、観戦できないでいる。例年だと・・・と続き、最優先するのは高畠高の試合だ。野球部ではなかったが、27歳になる長男の出身校だ。監督に世話になり、3年時に応援団長にしてもらった。

長男の在学時、全校応援の校歌斉唱はどこか弱々しかった。昨年、4年ぶりに初戦を突破した時、野球部員をはじめとした“全力校歌”を聞き、勝利に増して嬉しかった。高畠高の校歌は山形県の高校で唯一、古関裕而作曲によるものだ。また球場で歌いたいものだ。」と締めくくられていました。

ここに登場する野球部の監督というのは、もちろん、丸山先生です。

この投稿記事は、本校を卒業したOB、OGの方々はもちろん、その保護者の方々まで、いまの高畠高校はどうなっているんだ、大丈夫なんだが？と、本校の活躍に期待を寄せてくれる方々がたくさんいることの証です。いま、私たちの目には見えなくとも、多くの方々からの期待と応援のまなざしがあることを忘れないでいたいものです。

さて、皆さんがご存知のように、古関裕而さんという作曲家が歩んだ人生を俳優の窪田正孝さんと二階堂ふみさんが演じた「エール」というドラマが、NHK朝の連続テレビ小説として今年の10月まで放送されていました。

「エール」で風俗考証を担当した『古関裕而―流行作曲家と激動の昭和』の著者刑部芳則（おさかべ・よしのり）さんによると、

古関は交響曲やオペラをつくるクラシックの作曲家として大成することを夢見ていたため、流行歌の作曲は苦手当初はヒット曲には恵まれませんでした。

デビュー間もない昭和6年に「紺碧の空」という大学の応援歌を作ったことが大きかったと思います。古関さんは最初からマーチを作るのが得意だったわけではなく、「紺碧の空」の完成までにはかなり苦労しました。しかし、その結果、「紺碧の空」が優れており、作り方のコツを掴んだため、数多くのスポーツソングを作曲することになります。

古関が作る、力強く、明るい楽曲は、スポーツ音楽をはじめ、校歌、社歌、団体歌、自治体歌などに適していました。古関さんの音楽は「応援歌」なのです、

と述べている。

高畠高校創立80周年に作られた『高畠高校80年の歩み』によれば、昭和27年（68年間）12月1日に校歌が制定された。とあります。作詞は高畠町一本柳生まれで（学校の所在地が一本柳です）本校の教員や県教育委員、県議会議員なども歴任され、国文学や作詞、書道に造詣が深い完戸一郎先生。作曲は、福島市生まれの古関裕而に依頼した。古関は昭和5年から日本コロムビア専属作曲家となり、「紺碧の空」や「とんがり帽子」、「長崎の鐘」、「君の名は」などの名曲がある。本校八代目南部校長が、当時作曲家として人気の的であった古関を東京の自宅に訪問して、懇願の熱意が実って、本校校歌の名曲が誕生した。と記載されています。

今日もそうですが、今年はコロナの感染防止対策のため、校歌を歌う機会が極端に少なくなってしまうかもしれません。でも、本校の校歌は日本の音楽の歴史に刻まれる人の手によって作られた校歌であり、希望を持って生きていこうという人生の応援歌をたくさん作曲した人の手によって作られたものであるということを覚えておいてほしいと思います。

最後に問題です。音楽を愛する古関裕而氏らしいエピソードがあります。奥さんの金子さんといっしょになり、その家に電話を引いたのですが、その電話番号にもこだわりを持っていたようです。電話の下4ケタは次のうちのどれでしょうか。

(1) 5040 (2) 5400 (3) 5004

(1) の 5040は、意味のない番号です。

(2) の 5400は、高畠高校職員室の電話番号です

(3) の 5004は、五線紙 と読めるので、作曲をする際に音符を書き込む五線紙との語呂合わせで、古関が自分の家の電話番号にした番号だそうです。ということで (3) 番が正解です。

では、来年の1月7日にまた、元気に会いましょう。

